

都市と農村

やつらの力

なるほどやつらは力を持っている。
 ちよっとでも刃向えばすぐ殺りとばされる。
 いかにもやつらは強そうだ。
 だからみんなやつらの前にへこたれていて、
 だれも本当にやつらには強いんだらうか。
 そんなにやつらには力があるんだらうか。
 これは事実上問題にならん由題のようだ。
 しかし僕らにはどうも疑われてらん。
 僕らはいふんやつらに当って見た。
 そしてそのたんびに僕らは負けた。
 だが僕らはまだ負けてしま、たんびやない。
 負けるたんびに僕らの心に勝利が諷してた。
 やつらは弱いんだ、やつらには力もなんにも
 ないんだ。
 たにへこたれてるみんなをやつらの力を作
 ってるんだ。
 今に僕らがやつらの弱いことを見せややる。
 やつらの力を支えていけるみんなをどけてや
 る。

(大杉 栄)

| | | |
|------------------|------|----|
| 都市コミュニケーションの途 | ---- | 1 |
| いざ、内転稼業 | ---- | 3 |
| 一年の計は正月キャンフにあり | ---- | 6 |
| 雪深き弥栄より (そのいち) | ---- | 7 |
| 農産物は商品ではない | ---- | 9 |
| 私的な農業論 (1) | ---- | 11 |
| 地域闘争とコミュニケーション運動 | ---- | 13 |

No. 16

発行：大阪市東成区玉津二丁目 東成玉津郵便局留 コミュニ百人委員会
 郵便振替 大阪 79064

都市回廊への途

一 市民社会からの手かせ、足かせ一

個別的運動と共同体運動の相剋

「コミュニティ運動に於て、個人的生活の領域と共同生活の領域の区分を容認するのは、ナンセンスなことだが、この両者の矛盾が表面化したのは、我々日本人が都会で、共同生活、共同労働を始めて半月程経った時である。共同性、すなわち他者との関係のありようを追求する我々は、ますます個別的運動として、新しい個性（自我）を創り出さねばならない。

個性を持つ閉鎖性は、内的に個性であっても、外に對し、あたかも国家であるような場合が多く、そのような個性は、ガツガツした自己中心的なものであろう。

「コミュニティ運動で追求する個性とは、他者との相乘的關係のもとに、

集団を構成するものであり、集団に引きつられるのではなく、一人でも運動できる個別的根拠もある。

前置きが長くなったが、我々における問題は、都市生活（出稼ぎコミュニティ）をしているうちに、我々が意識的に捨象したはずの市民的表情的なかに見られた。

へ市民的人間とコミュニティ的人間

私は、市民とは意識と身体（意識が支配する自己、自己環境、生活空間）が、相矛盾した存在状況にあるものだと考える。

二の資本主義社会にあって、貨幣

は、人間同志を敵対させ、人間をその奴隷にしている。従つて、この社会で人間は、私的所有を当然と思ひ込み、それを疑うことを知らないでいる。

しかし、その人間の意識とは、反對に、人間の身体が付きかける周囲（社会）は、互いに依存し合う關係にある。つまり、このようにへ敵対し依存しつという奇妙な等式を持つ存在が市民である。

また、市民的人間は、生存の根拠を等式の左右のどちらにも置けず、無定見に動く性向をもっているかのようである。このような市民的人間からは、共同体的な信頼關係は、作り得ない。それに対し、コミュニティ的人間は、一己の自己の内なる市民的性向を意識的に把え、そして自己変革を通じ、市民社会と対決するこ

とよつて、我々は、コミュニー的
人間関係を追求するものである。

コミュニー的人間は、へ融合し共
存をその原理とするものであるが、
それは社会変革が同時に実践され
る時はじめて、達せられるものであ
る。

その時、自己の運動は共同体運動
として位置付けられ、又我々の目指
す運動は、その両者を同時に包括し
た全体的な運動でなければならぬ。
へ労仲を通じ、都市コミュニー像を

我々が、労仲を共同のものとし、
その日常的幻想にひたつていた時、
市民的発想から来る諸問題が生じて
きた。

男たちは、他のワルースと共同で
窓ふき仕事をしているが、彼らとの
関係で、仕事のスケジュール、道真

について十分に自主管理できていた
とは言い難く、又労仲に対する責任
とともに賃金分配方法に要求をはっ
きり主張できな(て)いた。

女たちは、紙器工場に女工として
入り、賃金面で会社側と衝突し、ア
ツプ要求を通じた。しかし、彼女ら
は、管理者と他の面をどういつ階級
的關係にあるのか、自治運営を勉強
会で学びながらも、十分理解できて
いるとは言えない。

今、我々は、出稼ぎをしながら、
このような具体的現場に出会い、少
しずつ自治運営の意味を学びかけて
いる。都市生活者が、コミュニーを
志向する時、最終的到着点は、職場
・学校という労仲の現場である。コ
ミューンを志向する者は、自己の市
民的生活経験、市民的へ身体、そ

してその論理そのものの中に、コ三
ューン像が現実化されない限り、そ
れは常にユートピアであるし、繰り
返すへ無の斗いであろう。

我々コミュニー志願者は、市民的
日常性を否定したことを、へ否定し、
し、まず我々の市民的へ身体を校
討し直すべきであろう。

出稼ぎ。コミュニー。

スタジュール

12月29日・箱づくり内取仕事おさめ

30日・窓ふき仕事おさめ

31日・卓球大会(予定)

1月25日・正月スタヂー・キャ

ソフ(講師・広河隆一、大沢真

一郎先生、こむろな塾で)

1月7日・東京方面里帰り

1月8日・コミュニー学校(16く5

キマツ協会、講師 長谷川 進先生
渡辺一衛先生)

いざ

内職雑業

女性軍十大奮闘日記

I

出稼ぎの仕事として、女性軍の名は内職の形で箱づく

りをやっています。

内職の仕事を選んだのは、次のような点からでした。慣れれば慣れるだけ収入が増える、共同作業なので懸念されるコミュニケーション不足も少しは補えるだろう、カラス拭きメンパーとのメンバー交代も自由にできる。

仕事は全くの単純作業です。日々歌ったり、話し合ったり、ムスッと

した顔で自分の考えに浸ったりしながら作業をしています。

今、私たちは仕事をどうして、賃金にのわる労働のおかしさ、中小企業の会社の仕組み、従業員たちの様子、眼のあたりにし、この場を少しでも納得できる労働のできる場にしていこうと思っています。

II

内職にはへいい仕事とへ悪い仕事がある会社は

言います。同じ時間、同じ労働を費していながらも、収入に差のある仕事のことです。会社は、この人にはへいい仕事ばかりというわけにはいかないと言います。両方を適当にやってみたら、均衡を保つのだそうです。

内職でつくったものの商品価値は労働価値によってはかれるものではないということを知りました。

日産火曜は「むらな」

ともすれば

金稼ぎに迷われそうなる生活

赤栄の地を離れ

ともすれば

朝・夕の通勤列車にまぎこまれそう

な生活

の中で

繰り返すことば

赤栄の運動

その明確化と深化

4つの闘争方針

コミュニケーション学校

あなたか

このコミュニケーション運動に肉わり

あなたに

このコミュニケーション運動を始める ため

に

私たちの日産の運動のひとつ

コミュニケーション学校

III

私たちは最初、一日一人、
二千三百円は無理せよに稼げ

る箱をつくるという話で仕事を始めました。が、仕事に慣れてきた四日目に、別の仕事をやって欲しいと言われました。私たちは、こちらは金をもらおう立場なのだから言われた仕事はやらなければならぬと、ためらいもなく、また、前もって単価を聞くこともなく、その仕事を引き受りました。仕事が終わりかけたとき、単価6円と知りました。計算すると、一日一人五百円しかありません。そのときから、だんだん、私たちの仕事・会社に対する見方は変わって来たように思えます。一時的な収入と、いうことで、感傷的に仕事を片付けようとしていたところに、芯がはいったようでした。

IV

単価についての一回目の話し合いに行ったところ、その

の仕事は、パートで働いたとしてその金額から計算して単価をだすということになりました。その結果、倍以上の単価となりました。その理由付けに、他の内販屋さんのところまで材料を運ぶ手間、カリリン代が省けるといふことで納得されたようです。いくら省けるとはいえ、単価が倍以上になっても会社の採算があつたというのは、普段、もっとも内販屋さんに払えるのだと思いました。一回目の交渉に事務所へ行ったとき、そこに居た従業員の様子には何か硬いものがありました。その視線は明らかに会社側に向つたもので、私たちをとり囲んでいるようでした。この会社は従業員たちを社長一族の系列の下に、家庭的雰囲気とかで

〔作業の日〕 毎日 午後から

これまで特定の個人の間にかかっていたのもうの作業—コミュニケーションの編集・印刷・発送、またパンフ作りなどを共同作業化しようとするものです。

〔勉強会〕 毎火曜 夜6時から

未知の友人との意見の交換、各自の問題意識の明確化、各自の運動を推しすすめるための知識的材料の交換の場としてあります。現在はロシア革命を勉強中、プロロードニキ運動、ゾグイェト・ゴミュン、ポルシェ、ヴィキ体制、と如何にして土地所有者に対して行ったかの問題に焦点を当てて、あと2・3回の予定で勉強していただきます。

今後は、各自が勉強していることをまとめて時間をもっていく予定です。

包んで、うまくおさめているようです。

二回目の交渉から、私たちは、パートの金額にはこだわらずに、最低限保障して欲しい、これだけは必要であるという線から単価を計算し、要求してきます。そして二回目の要求も、また、すんなりとおりました。その理由としては、どうせ3月までだから、こうるさといけれども眼をつぶうつという姿勢と、私たちが居ることと、緊急に必要な品物がたやすく頼める「便利屋」という点とが考えられます。

やはり私たちの要求がすんなりとおったことは、肩すかしを喰わされたようで、何かがごまかされているという気がします。が、その上であんのんと座りこもうとは思いません。私たちがへいへい仕事Vをできま

としても、へい仕事Vがあるのなら、ちっとも問題解決にはならなれないと思います。

あの事務室へ交渉に行ったとき、従業員視線が私たちをとり囲むのではない状態を当面は望みます。せめて、私たちの要求の返答を自分の身として、私たちと共に聞いて欲しいと思います。ですから、そのための手段を模索することが、今の私たちの課題です。

そのような事を見つめながら、私たちは、金稼ぎに、毎朝曇木眼鏡でラッシュにもまれて、仕事場へと通っています。

(佐々木 色子)



「こむろ塾」が塾生に感

こむろ塾は24日のクリスマス・パーティーを終え、二度目の冬休みにはいった。塾を始めて満一年。その一年間に、のべ26人の中学生が、13人のじろつと先生と勉強した。

「ただの学習塾」ではない、「塾生団体・こむろ塾」は何をやったのか。通信四号発行、母親懇談会一回ハイキング、フェールへ……。そんなことより、「試験前になると生徒が塾を休む」学校と同じように生徒が自身の授業になつていける。先生同志が月に一回も顔を合わせないこともある。やれなり大切なことをいっぱい抱えこんでいる。

学校・教科書・試験によって自由を奪われた中学生を解放できるのは、私たち自身を現実のしからみから解放した時でしかありません。今、塾ではこの視点を見落している。

一年の計は正月キャンプにあり!

常駐者も11人にも増えて、弥栄の暮らしは やって行けるのか
11人でもいっぱいなのに、キャンプの計画をするの

10日に1回くらい無農薬の野菜を食べても何にもならない
都市の人たちの自給を弥栄の野菜で占領するには、都市に直販の拠点を...
本島にだけかが住みついて直販をできるのか

「お正月はのんびり、こたつにはいって、テレビ...」
なんて 思っている あなたへ...
たまに、のんびりなさるのもいいでしょうが...

弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい

弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい
弥栄の共同生活をしたい

弥栄をとりまく私たちの共同体運動には、なんやかんやん・あれやこれや、みんなで アイデアを出し合い、考え合わなければならぬ問題が山のようにあります。

そこで、次の要領で「正月スタディ・キャンプ」を計画しています。
参加希望の方は、「こむうな」宛、早めに連絡下さい。

〔日 時〕 昭和49年1月2日・正午～6日・午後3時ごろ

〔場 所〕 こむうな塾 (大阪府四条畷市南野1379-3)

〔交 通〕 国鉄片町線京橋より20分「^{ラフォーレ}四条畷駅」下車 徒歩15分